

第十一節 東京音楽学校評

初期の東京音楽学校に対する批評は将来へ向けて希望に満ちた東京音楽学校の活力を称え、それを支援する内容のものが多く、その後議会で存廃論争から東京師範学校附属時代には、東京音楽学校を擁護する内外の論評が熱心に発表された(第二章第二節、第三節を参照)。だが明治三十六年の「オルフォイス」上演以降、主として風紀上の見地から、東京音楽学校に対して反省を促すきびしいマスコミの批判が相次いで現れた。官立学校の中ではただ一つの男女共学学校であり、「音楽」という芸術学問を通して、他の官立学校には見られない自由な雰囲気、噂の対象となる温床を作り出していたのかもしれない。東京芸術大学百年の歴史を振り返ったとき、それらの意見は当時の姿をとどめるものとして見過すことはできず、あえてここにすべてを掲載することにした。

資料は発表された年代順である。はじめに資料の原出典を『』内で示し、つづいて資料内容を記述した。

『音楽雑誌』第十七号、明治二十五年二月

音楽の普及

朱子の志は徳川幕府が鋭意以て士平民を問はず注入せしめたるより一般民間僻地までも及ぼしたるなり今や我小学校教育も理學的進化的により其心意を開發しつゝあるなり是を以て現時多數の人は理學的志想に富む

音楽も亦道德教育好尚修練の一部として普通學科中に課せしめら

れたり吾人は當局者の周密なるには敬服措く能はずしかのみならず文部省が音楽學校を設立して音楽主導者を養成せらる然れ共此く當局者の鋭意なる熱心に對して民間が果して満足を與へたるや否れ蓋し文部省及音楽學校の誠意を地方教育家地方當局者及音楽界の人々が服膺せざる故にして音楽に盡力と熱心の薄きに源因せるものならん乎

言ふまでもなく教育家は地方教育の主宰者たりされば地方の學事も道德も其盛衰に關する責任は主に教育家にあり而して地方當局者の勉務と熱心とは亦教育の如何に干す是を以て吾人は今日音楽改良即ち風俗の改良及音楽の普及を謀らんとせば地方教育家地方當局者の盡力熱心無くんば其目的を達する能はずして矢張り從來の音楽たるのみ吾人は他普通學科のみ一新上達して獨り音楽に限り發達の歩緩かなるをかなしむ吾人は府縣當局者に於て教育家及有志者を獎勵して年々二三名づゝを撰び東京音楽學校へ入學せしめ一方には尋常師範學校中學校高等小學校にて必ず音楽學校卒業生一名づゝを聘用するを務められん事を切に望む此等の事或は實際行ふ能はざる事情あるも知るべからず然れ共世間の事皆望んで得べきものならず唯其精神を以て方向を取り漸次之に達せんことを務むれば其途に近づくの時機あらん一言以て世の教育者及音楽界に質す

『音楽雑誌』第二十五号、明治二十五年十月

河野文相の音楽校參觀

過日河野文部大臣には辻次官及濱尾久保田兩局長を隨ひ東京音楽學校を參觀せられたる折其校の授業及び管理上の事に就き種々質問

等ありたるか其要領を聞き得たれば左に

文相 貴殿が日本の音曲を聞いて如何なる感相あらるゝや

ヂツトリビ 凡そ國には各特性ありて同一ならされとも日本にて

良曲と謂ふべきものは吾等の感情には悲哀に感ずるなり

文 洋琴は其元如何なるものより作れるか

チ 遠く洋琴の由來を温ぬれば元とは只たあるものに絃を張り鳥の

羽にて張せしものなるが漸次に改良を加へて今の形に至りたるは

僅に一百年前頃なり

文 本邦人に適する簡便の良い樂器は何なるや

校長 樂器は其數最も多き中にも箏は邦人の嗜好にも亦生計の程度

にも適當せるものと考へらるれば此箏をも少し完備のものに改

良せんと種々考案せしも其奥に入れば入る程ピアノ製造の經歷を

復習するの感を覺えたるにより目下中止致して居り升

文 今日唱歌中鼓聲杯の如きは曲譜と歌詞と何となく其當を得さ

りし様に聽し如何

長 彼の歌詞は歌曲に適合せざるものにして現に今改作研究中なり

しが忽卒の際其儘に致して奏せしめしものなり

其他數ヶ條の質問等あり數時間の演奏中も能く注意せられ特に唱

歌中歌曲の適不適まで深く注意の至られしは校員も驚き入し程にて

斯く大臣を得しは實に音樂上に好大臣を得しとて大に悦び居る由因

に云ふ會て聞く處によれば河野大臣には謠曲を得意にせられ音聲至

極美音なりと、

外國教師本邦樂を取調ぶ

東京音樂學校御雇教師ヂツトリビ氏は本邦にありて歐州學を教授

せらる數年其間本邦音樂を取調べられ箏曲集古今雜曲集等を參考と

して撰定せられたるもの凡二百五十餘曲に及び最早や種曲を暗んじ

數へ歌五つ通りあるものゝ差違及春雨曲の種々異点を口笛杯にて類

別する等は流石に専門家丈けありて其熱心も亦感すべき事なり

『時事新報』明治三十一年四月六日

音樂學校に就いて 音樂學校は高等師範學校に附屬し、去る明治

二十六年に至り大いにこれを縮小して以來、外國教師を解雇し、目

下本邦人のみにて教授しつつあるも、外國音樂の粹を極めんには、

是非共斯道に堪能なる外國人を雇聘せざるべからず、今回同校教授

上原六四郎氏主事を免ぜられ、矢田部良吉氏これに代わりたるを見

て、同校の前途を云々するものあれども、何人の其局に當るにもせ

よ、同校を獨立せしめ、大いに規模を擴張し、少なくとも三名の外國

教師を雇い入れずんば、到底その刷新を見るを得ざるべしと云。

『女學雜誌』第四二四号、明治二十九年七月

音樂趣味の教育を論じて音樂學校に及ぶ

鷗村 生

曩に幸田延子女史歐洲より歸朝し、金龍山畔綠陰なほ淺き處に一

度びわが多年海外脩養の妙腕を振ひ妙音を繰りし以來、音樂の事漸

く世上の注意を惹きたるが如くに見え、音樂學校はまた女史を得

て、やゝに活氣を持ち上げたるが如くに、該校内に同聲會の組織せ

られたるも、其一現象たらん。此時に當り吾人は、更に國民教育に

於ける音樂の必要を思ひ、従つて之に對する音樂學校の責任に大なる囑望を置けり。

音樂を以て單に遊戲の業となすは、我國人傳來の誤想にして、外邦人の之に重きを置くことの甚だしき、實に敬服に堪へざるものあるなり。ルーテル以來獨乙ドイツに一の諺あり、曰く音樂なき所には惡魔ありと、獨乙は武勇を尊ぶの國たると共に哲理の研究を喜び、而もまた音樂を以て、他邦に秀で、ベトーフエン、モツアルト、メンデルゾーン、ワグネル以下世界名譽の大音樂家の多數か、其籍を獨乙國民中に列すると、實に彼國の誇りなり。英といひ米といひ佛といひ又露といひ之を敬重すること敢て彼に譲らず。彼國の士人淑女にして音樂の興味を喜ぶことを知らざるはなく、其教會と其學校とは、常に音樂を伴ひて、人民を感化し教育するものを、彼等によりて音樂の悦喜推重せられずしてやむべけんや。而して我邦人が、西洋音樂を受け入れて之が趣味を解するに至り、併あはせて在來の音樂をも尊ぶに至りたるは、實に米國宣教師の功に歸すべくして、彼等は基督教の傳道と共に、西洋音樂を輸入し、邦人をして音樂の重んずべく、喜ふべきを教へたるなり。

由來米國人の如きは、音樂の趣味を解せざるを以て、人の恥ぢらふべきの事と思へり。宜えなるかな彼等が我邦に來りて、宗教及び教育に従事するに當り、其最初よりして、音樂の獎勵に勉めたることや。彼等は先づ瀛西えいせい樂仙がくせんの餘韻を教會の講壇に響かせて、次きには之を彼等の設立したる男女學校の教室に響かせたり。邦人の未だ西樂に對し殆ど一の趣味をも有せず、文部省が伊澤脩いざ二、瓜生繁子等によりて音樂取調所を組織するの前、明治五六年の交に於て、京濱

阪神の間に創立せられたる數多の宣教師女學校は、實にピアノ、オルガンの音樂を以て、學科の重きに置き、教師等皆自ら率先して、生徒が音樂趣味の養成に意を用ゐ、斯この技の振興を獎勵したりき。彼等はまた其男子學校にも之を輸入することに後れざりしなり。故に我國に於て音樂が尤も早く味はれ、尤も早く發達せし處は、基督教會に聯屬せる區域内にてありけり。加之しかのみならず今日にても、吾人は堂々たる日本唯一の音樂學校の音樂が、基督教々育に屬する音樂に對して、果して毫さの遜色たもなきことを得るや否や疑ひなきこと能はず。地方の音樂に至りては、小學校若くは高等女學校の未熟なる風琴の彈奏、不調子の唱歌は斯道の教育に於て極めて少量の効能を有せるのみにして、其全權は實に此處こゝ彼處あそこに存在せる宣教師女學校の掌握する所となりて、多少の勢力を及ぼしつゝあるなり。

然れども尤も早く進歩したる基督教會聯關の音樂と雖も、之より外人の分子を取り除かば、なほ甚だ幼稚なるものの其跡に残さるべく、而して日本樂道の中心たる音樂學校の如きも、樂界に於ける勢力の極めて乏しきものたり。故に概するに、今日樂道の進歩は頗る幼稚初階のものにして、事實上、邦人樂士の作に成れる新曲なきに非らざれども、單純なる軍歌進行曲調位に過ぎずして、それとても必ずや在來の曲節に幾許の手加減を加へたる迄にとどまらんなり。また唱和せらるべき邦語の唱歌に乏しき所以、蓋し一は詩作界の不振なる状態に在るが爲めなりと雖も、假令たとひ新作詩歌の尤品いとうひんの、以て歌唱するに堪へたるものあらんにも、今日の如く樂師曲譜家に其人なきに於ては、未だ以て或は優美に、或は壯烈なる唱歌謠のあるべきを望むべからず。而もまた今日の唱歌作が、鳥居忱氏たに一派の人に

よりて左右せられつゝあるに於てをや。「君が代」が、日本帝國のナショナル・エイグ歌として満足せられ、外山調の新體詩が、單調無味なる曲譜を取り、軍和として唱歌せられて悦ばるゝ時代の國民は、未だ以て音樂の趣味を蓄へたるものと稱すべきに非ず。

以上音樂と凡稱するもの、實は西樂を意味して、こは輸入後日猶淺ければ、其發達進歩の度に向つて多きを望むべきに非らざるに於て、翻て日本在來の音樂の状態を顧みれば、其衰微の久しきに亘りて、今なほ單に舊套を墨守するに止り、西樂輸入後彼に伴つて、聊か振起し、世並みに、音樂會などへも屢ば顔出しするやうになりたるものゝ、此樂たる既に其達し得べき極點にありて、なほ樂としては頗る幼稚の發達を遂げたるのみ。故に將來我邦の樂道として、發達せしむべきものは、樂器、節奏、音階、曲調、發想に於て、尤も完全なる發達をなしたる西樂たらざるべからず。西樂は即ち日本樂道の主權者たるべきものにして、國民は既に西洋樂器を假りて以て、其情感藻思を遺憾なく彈奏せんことに志せるなり。而も國民教育の具としての音樂は、必ずやこの完全にして、尤も多くの趣味を備へたる西樂に依頼せざるべからず。西樂東樂、此二者眞價の優劣は兎に角に、吾人は幼稚なる在來の音樂を以て、教育上子弟の音樂趣味を開發し得べきの捷徑せつけいを有するものなりと信ずること能はず。普通教育上音樂の要は、其趣味を開發することに在りて先づ藝の熟達を思ふものに非らず。而して音樂趣味の開發は必ずや、西樂に俟たざるべからざることは、世の教育家、既に幾許の經驗を得たるならん歟。

音樂の趣味の開發は、教育上甚だ緊要なる條件なり。櫻痴居士おうちが今の學者の宗教心と歴史の智識とに加へて、音樂の趣味に貧しき

は、彼等をして物質、實利にのみ馳せしむるの所以なりといへる、言頗る事の要領を得、殊に音樂趣味の缺之を擧ぐるは、尤も穿てるの語といふべし。音樂は天地にみてる諧音、調音の神秘が、壓板あつばん、絃線くわんせん、管口くわんこうに觸れて吹彈すゐたんし出さるゝの聲なり。此聲の趣味を解し、快感を覺ゆるものの平和の調には神濟しんせいみ、體胖たいゆたかなるを感じ、悲哀の調には漣然さんぜんとして紅涙の下るを覺えず、壯烈の調には心跳り肱張るを見るのみならず、而も妙へなる音樂の聲には、野の馬も秣飼もくごふをやめ、淵うみの魚も浮び出づるためしも稀れならずとかや。樂の力たる天に在りては鬼神を動かし、地に在りては蚊龍かうりゆうを舞はしめ、人に在りては男女の良心を薰くん和わし、其美想を啓發するものたり、斯樂このは正樂をいふ。郢衛ていゑいの樂、其正しからざるものに至りては、彼と相反して、是亦畏るべきの害毒を及ぼすべし、謹まざればあるべからず。此故に先王はいたく邪樂を排することありて、而して正樂を以て士人を教ふるを禮の次ぎに在りて、今人もまた之を以て教育の要素となす、夫れ人、美觀の思想なきはいふに足らず、美育びいく於此この乎この其要あり。然るに音樂は、諧調わい和音わいんの妙聲めうせいによりて表はるゝの美術にてあるだけに、他の美術に優さりて、其感化の境域と勢力とに尤も廣大に、其幽默妙致の尤も解せられ易きが爲に、音樂は人心を薰和するの効に於て、他美術の企て及ばざる處あり。美育の之を以て尤も重要なるものとなす所以實に茲こゝに在り。

音樂の趣味が教育上薰化の効力は實に驚べきものあるなり。イスラエルの歌仙ダビテ王が、其なほ牧羊の兒たりし時、立琴ハープを弾じて、時の王サウルが頑迷なる靈魂よりして、惡鬼を追避おひしりぞけたりし、其古そのいにしへの不思議は、今なほ斯道このみちによりて演られつゝあるなり、獨乙ドイッ

または米國にて於ては不良少年を感化教育して、彼等少年の温和從順の徳性を養成せんとするに、音楽を以て尤も大なる効力を奏し得べきものなりと認められたりといふ。如斯き効化を有するものなるに於て音楽趣味の養成の教育上振作せしめざるべからざるの理ますく明かなり。然るに我邦音楽趣味教育の進歩は實に緩慢驚くべきものにして、小學教育より中學教育に及んで、國民は那計の音楽趣味を以て教育せられつゝあるや、之を量れば、其極めて微小なるに痛嘆せずんばならず。さらば今國民教育の音楽趣味開發を昌んにし、之を進歩せしめんとならば、現今の小學校の音楽をして、なほ數層の重きを有せしめ、また尋常中學に音楽の科を設け、兩者共に精良なる樂器を備へ、堪能の樂士を聘して教授の任に當らしめ、其體育に注意するが如に、之に注意し、之を獎勵すべし。また高等學校、各種専門學校、帝國大學等に於ても同様音楽趣味の養成に怠らざらんことを要す。如斯くに音楽を振作獎勵するの結果は、教育上必ずや喜ぶべきものあらん。吾人は是あるべきを信じて疑はざるものなり。雷に今の學者のみならず、其學者の前生たる下は小學生より、上は大學生に及んで、我邦男子の學生の状態を見るに兎角に鄙野粗暴に流れて、寛大優長の風に乏しく、實利的物質的に奔りて、精神的靈性的に缺たるの弊あるは、一には宗教的の教育を受けざるが爲めなりと雖も、また以て美育に缺乏せる爲ならずんばならず。今この弊を救ふに、音楽趣味の教育を以てせんには、奏功必ずや著しきものあらん。戦後教育の尙武的なるに偏向すること、たゞ其儘にして進歩せんには、學生をして、必ずや益々鄙野粗暴なるに馳せしめんとす。子弟の教育、要するに外よく勇剛に、内よく寛裕ならんこ

とを期し、外邦所謂紳士の品格に倣ひ、我邦古に在りて士人を教育したるの道に範るべし。兵馬倥偬の陣中に懷を詩歌にやり、情を吹笛に寄する古英雄の體度は、以て國民教育の模範たらしむべき所なり。故に美育の主たる音楽の教育は、尙武的なる今後の教育に於て、殊更に必要ありとす。且又音楽が其壯烈悲壯なる發想をなしては、國民が武勇の精神を奮興せしむるに於て、著大の効力あらん。吾人は彼獨乙國民が、武勇を以て他邦に秀づると共に、音楽を以て世界の雄たることを羨望す。彼二者は實に剛柔相托して、其國民が精神の雄大なるを致したること必ずや多きに居らん。されば獨乙聯邦の大功業の、素より、モルトケ、ビスマルクの鐵血政略の結びし果なりとはいへ、其一半は實にアルントが *Was ist das Deutschen Vaterland?* の國民歌曲に歸せざるを得ずと稱するもの、豈に偶然なりとせんや。

國民の音楽趣味に要する所多きは、其教育によりて供給せらるべきは言ふを待たず。今夫れ歐米各國に於ては、教會の音楽なるものゝ、國民が音楽趣味の開發に補ふ所甚だ多しと雖も、我邦に在りては、未だ如斯きを望むを得ずして、主として之を各種學校の音楽に俟つべきなり。各種學校の音楽を擴張興作すべき方案は前に述べたるが如くにして、而してこの擴張の原動力を支給すべきもの、素より其幾分を宣教師派男女學校に仰ぐことあるべし、然りと雖も我邦音楽教育の中心たる音楽學校は、其尤も多くの部分を供給すべき責任あるものにして、盛んに堪能の樂師を養成して、彼等をして國民の教育に従事せしむべきなり。然るに該校の進歩なほ幼稚なるに加ふるに萎靡振はず、曾て獨逸の體面を持したりしも、今日にては僅

に高等師範學校に隸屬して其形を存するの觀あるに過ぎず。當路者も亦之に多くの注意を拂はざるものゝ如し。其樂堂に一臺のパイプ、オルガンの備へだになきこと、其體面に於て損ずることなきに非ざるも、これなほ可なり。其教授の任にあるもの、今や一人の幸田女史を獲て、やゝ志を堅うするに足れりと雖も、女史以外未だ名手其人ありとも聞かず。樂界に於て、該校の多く推重を加へざるも亦止むを得ざるなり。如斯きは吾人が我邦樂道の爲に悲む所にして、また國民音樂教育の上に囑望する所多きよりして、其勢力の微々たるを嘆ぜざるを得ず。音樂學校は實に其責任の爲に擴張進歩せらるべく、吾人は、また當路の教育家が此校に多くの注意を加へんことを希はざるを得ざるなり。

『教育時論』第四一一号、明治二十九年九月十五日

東京美術學校と音樂學校

我國は美術國と稱せられ、自らも美術を以て任ずる割合に、主として此方面の教育を掌る學校が、唯僅に東京美術學校と、高等師範學校附屬音樂學校とのみに限れるは、頗る怪むべき、現象と言はざるべからず。美術國といふ名稱は、實は今代の美術が博うし得たる聲譽にあらず、吾等先代の美術家が苦心經營の結果、適今日に輝き出でたるに外ならず。然るに今此先人の聲譽を墜さず、以て美術國たるの面目を全うせんに、唯此二校を以てせんとするは、少し大膽に過ぐる嫌なきか。試に邦人に幾何の美術的素養あるかを問へ、耳の修練は如何、將た又手の修練は如何。斯く詮索し來れば、美術國の人民、案外美術的修練に乏しきを發見すべし。此案外に美術思想

に乏しき人民をして、一般に美術的素養を得しめんとするに、唯此二校を以てせんとするは、山を築くに僅に一簣の土を以てする譏なきか。吾等は強ち美術學校の多く設立せられんことを望む者にあらざれど少くとも現在せる學校丈は、今少しく之が擴張を企圖されんことを望む者なり。今の東京美術學校には現代有名の美術家は大抵網羅し、殊に本年九月よりは、西洋美術をも加へて研鑽の一助に供せんとし、而して音樂學校、又幸田延子女史の新に歸朝せるありて、着々改良を計る所ありといへども、規模小なるが爲めに、其多般の目的に應ずる能はざる憾あるを如何せんや。見よ、世人は、此兩校に向ひて、大音樂家、大技術家の出づるを望むのみならず、又普通教育上、美育に従事せる教育家の出でんことを要求し、殊に又、國樂の制定、新技術の創作をも希望するにあらずや。吾等は其望む所の大にして、給する所の小なるを憾む。

『女學雜誌』四八五号、明治三十二年四月

瀧廉太郎氏と橘絲重女史

瀧廉太郎氏の、ピアノに於て、將來望多き好青年たるを宣揚せしは、我儕の世人に先んで、なせしところなり。今や、文部省がピアノ專修のため海外留學生を派遣せんとして、廉太郎氏の其撰に當るべき由を耳にし、雀躍禁じ難しと雖ども、又一方には橘絲重子を押すものあるを聞き、稍々憂へざるを得ず。女性なるものの凡て學藝の極致に達し難きはいふまでもなく、殊に音樂の如きにありて、その發動に生氣を欠くは、尤も明なる事實にして、辭むべからず。その一たひ婚儀を整ふるや、到底藝術の化身を以て之に望むべから

ず。さればとて、政府は曾て留學生なりしの故を以てその戀愛と其婚儀とを禁制するの權能なし。然るに、かの大幸田子が、女性にしてしかもよく成効しよく生氣ある所以のものは、その超凡にして幸田一族の血をうけ、女人ながらも宛然男子を凌ぎ、一種特得のひと癖ありて、子が自ら數々口にする如く『押し強き』故なり。されど、こは到底纖妍たる橘子に望むべからず。加ふるに其健康また甚だ豊かなりとも見えず。其伎倆の如きは、暫く禮を重じて言はずとするも、當局者若し眞の眼識智慮あらば、須く瀧廉太郎氏を遣るべし。氏は三昧に入り得るの質ある人なり。

『帝國文學』第五卷七号、明治三十二年七月

明治三十二年の音楽界に対する批評文であるが、東京音楽学校を主に
行っている。

音楽界

七月の初めにあるへき音楽学校卒業式を終らば、又秋風の立ちそめて、「シイン」の歸り来る迄はいつこにも演奏會の開かるべくもあらじ。されば今は今年上半年の樂界の消息を傳へて、後半期の如何を想ふには好き時節なるべし。去年の終りより此頃に至る迄、音楽界に生ぜし主なる出來事は、十數回の演奏會音楽學校の獨立、「ユンケル」氏の雇入れ、幸田幸嬢の留學確定等なり。かく列擧し來れば眞に華かにして急足の進歩ありし様なるが、其十數回の演奏は如何なる有様なりしかを思へば、決して満足し得べきものならず。一月早々開かれし明治音楽會は先づ失敗せり。次で中央會堂に開かれし慈善音楽會は、幸にして來聽者の多數を得しも、演奏せる

ものにて聞くべきものは「ケーベル」博士の「ピアノ」一つ位とはなさけなき事ならずや。二月には一回もなく、三月に音楽學校學友會音楽會等ありき。此會はたゞ當校に「ピヤニスト」神戸嬢あるを紹介せしのみ。同じ月の明治音楽會は稍成功せり。「ハウス」氏を聘して技術顧問とせし甲斐見え、管絃樂等前々に比しては數段の進歩を示せり。四月の末に開かれし音楽學校演奏會はめづらしき盛會なりき。橘嬢の「ピヤノ」、「ユンケル」「ケーベル」二氏の「ピヤノ、ヴィヲリン」合奏、幸田延嬢の獨唱等皆それ〴〵得意なりしならむ。されど最後の合唱國の光は大に當校聲樂の價値に疑を抱かしめぬ。同じ月の明治音楽會は中通りの成績なりき。「ハウス」氏は病氣にて指揮する事を得ざりしが、會員各自十分の注意を以て演奏し、皆それ〴〵にめでたく、ことに佐藤左久氏の箏曲はき〴〵ものなりき。同じ二十九日錦輝館に於きて、大日本婦人教育會の催せる音楽會は幸に聽衆多かりき。五月六日の女子獨立學校音楽會は不成績なりしがこれ等の慈善會は別に論ずるに足らず。たゞ怪しきは七日に開かれし同聲會なりき。來會者の少なかりしは天氣の都合として、又餘儀なき事なれども、曲目至て面白からず、しかも外人の演奏を主とせる如き有様なりしは、兎に角當時一流の樂人を網羅する此會としては相應しからざりき。同じ月の半に開かれし音楽學校分教場の試業會は、まだうらわかき生徒諸氏の技として評するまでもなし。此月の明治音楽會も一通りの出來にて取出で云ふ程のこともあらざりき。此他にも二三の慈善會等ありしが、總じて多數かりしにひきかへ、いづれもめざましき程のものなく、前年のに比して寧ろ遜色ありと云ふべし。されど當年上半期の演奏會に於ては、發達

進歩の跡殆んど見えざりきといはんも酷ならじ。

音樂學校の獨立は久敷以前よりの問題なりしが、三四月頃に至りて確定せり。されどこれもたゞ名義の變更のみにて別段の改善もなきやうなり。此校の内情などもらすは、好ましからぬことなれば、今は云はねど、兎に角其統御者の適任ならぬは疑もなし。從て部下の人々が自ら我儘なるはまぬかるべくもあらず。此際獨立を機として十分の刷新ありたきものなり。

獨立と殆ど同時に、「ユンケル」氏は入て此校の教師となれり。

此人去年あたり渡航し來りて以來、京濱間の演奏會に幾度か其技を示して、一個の「ゴオリニスト」なる事はよく知られたり。されど我帝國唯一の音樂學校の教師となり、兼て式部音樂隊の指揮者とならむとは、余輩の夢想だもせざりし所なり。此人果して一校の指導者管弦樂の「コンダクトル」たり得るの人物なりやは、未だ疑問に屬す。嘗て兩三度此人の「アレンドメント」になれる管弦樂をきゝしが、余輩の見若し誤らずは未だ其器にあらざる如く思はる。此人を得きとも、音樂學校良教師を得たりとは未だ容易に斷ずるを得ず。

音樂學校より海外留學生を派遣せんとは前々よりの風説なりしが、選遂に幸田幸嬢に落ちぬ。當局者が留學生を派するは單に技術に秀しものを作らむの目的ならば、幸田嬢こそ最も適任ならめど、もし其目的にして其學生歸朝の上は、此校の有力なる指導者となさむと云ふにあらば余輩は嬢の撰出に首肯し得ざるなり。總て學問技藝を問はず、多數人の上にたちて統御の任に當る者を、女性に求めんは失當なり。かゝる事は人の皆よく云ふ所なれども、ひとり音樂

にありては猶未だ迷のさめきらずして、望を常に女流樂家に置くの弊あり。こは一方には男子に於て技術に秀でしもの少なき爲ならむも、技藝の二の町なる男子其拔群なる女子よりも、よく多くの仕事をなすものなり。當時はなほ未だ洋樂創立の時代なれば、一人の卓越せる技術者を作らむより、寧ろ音樂教育に長ぜし人を作ること却て急務ならずや。

音樂學校はかく時勢に適せざる方面に勉めつゝある間に、式部、外山、近衛等の各音樂部は極めて沈黙を守り、たゞ式部の諸氏は月々明治音樂會に於て働くのみ、當年前半期の洋樂界は其裏面に於ては、寧ろ怠情に過したりと云はざるを得ず。

かく洋樂界が無爲なりし間に、和樂界も亦至て平和に保守的なる半年を過したり、從好會等二三の催しと、各家の春季演奏會とが主なるものなり。何處にても琴三味線の音聞こえて、外見大に盛なる如く感ぜらるゝも、箏曲は山勢氏一派の專有となり、其欠點なる無味の奏法は弟子より弟子に傳はりて一層に甚しく、余輩をして漸く「窓をもるゝ六段江の島」に耳を掩はしむるに至れり。只二三年以前に北越の旅路より歸京せる佐藤左久氏の技倆非凡なるは感服の他なし。もし世人が門閥の迷を去り、此人の技を學ばゞ、箏曲に一生面を開かん事疑ひなけむ。長唄清元の如きに至りては、眞に保守一方に流れ殆んど其改良に望を絶たざるべからざるの有様にあり。從好會にて改良せる汐汲の如き、未だ満足する事能はず。

如是叙し來らば樂界の前途は進歩の望皆無と云ふが如くなれども、又決して然らざるものあり。此春我が皇后陛下は音樂學校に臨御ありて、親しく職員生徒の演奏を聴かせ給ひき。此榮譽は斯道に

とりては少なからぬ奨励となりき。又外山、伊澤等の諸氏は幾度か音楽に對する意見を公けにせられ、加之演奏會の度々に技術の批評を掲ぐる新聞紙あり。之れ等は皆世人の音楽に注意し來れるを證するに足る。且つ音楽學校に於ても、昨年より分教場を設けて、一般好樂者に斯道研究の便を與へたり。なほ又青年樂手よりなれる明治音樂會の、幾多の失敗に屈せずして益勉むるあり。若き「ピヤニスト」なる瀧氏の如き、其技藝の日に月に進みつゝありと聞く。されば余輩は涼風のわたり初めて、都の再び賑はん頃に、目ざましき演奏會の數多くあらんを期して疑はず。先進後進の樂人諸君が相扶けて音樂の爲に盡力し、其發達をはかられん事は、心よりして望む所なり。

『帝國文學』第七卷二号、明治三十四年二月

趣味の墮落

明治の改元ありてより、此に三十餘年。維新の改革ありて、次ぐに地方の紛亂を以てし、新舊兩思潮の衝突となり、保守派の反動となり、極端なる西洋心酔となり、文武の揆離となり、十年の役此に起り、次に佛國的思想の輸入ありて民權の呼號となり、國會開設の請願となり、而して後憲法は制定せられ、國會は開設せられ、獨國的思想の注入あり、内政漸く擧り、秩序漸く恢復せられて二十七八年の對外的膨脹あり、對露的抗進あり。今や島帝國は外に向て其國威を宣揚すべき時節にまで到着せり。斯くの如くにして國家的進歩は、輒近三十餘年に於て甚だ觀るべきものありと雖も、社會の渾沌は依然たり。社會の秩序は未だ整頓に至らず。更に觀るべきの調和な

く、更に觀るべきの融化なく、未だ明治なる新風俗は作られざるなり。明治の文華としては、唯西歐物質的文化の靡然吹きすさぶあるのみ。然れども翻て思ふに、奈良の奠都は實に大化以後六十餘年に當れり。元祿の文化は元和偃武以後實に六十餘年を隔つ。大化以後三十年は猶飛鳥淨見原の朝なりき。元和以後三十年は、猶大猷院時代なりき。明治の社會が三十餘年にして猶未だ整頓に歸せざるもの豈怪むに足らんや。然らば則ち苟くも明治社會の爲に畫せんとするものは、今に於て漸くに其發展をはかり、調和を策し、新風俗新好尚、新文化を作るに銳意たらざるべからず。

明治の社會に於て最も寒心すべきは、獨り調和の見るべからざるのみならず、趣味の墮落是れなり。是も物質的進歩の影響なるべしと雖も、我等は年を追うて次第に國民好尚の陋劣となるを認めずんばならず。西歐的趣味好尚風俗は潮の如く流れ込めりと雖も、未だ此國の趣味好尚風俗と調和するに至らず。而して國民は古日本の趣味好尚風俗を忘れて、獨り墮落墜下せんとす。若し棄て、顧みずんば、嗚呼何の日にか誇るべき明治社會を現ざるを得ん。我等は是に至て百年河清の歎あらんを恐るゝなり。

試に樂界に就て献言せんか。西歐の清新なる高山流水の調は、其樂器と共に輸入せられ、國家は之を奨励し、國家的事業として學校の建設さへにあるなり。年々若干の留學生をさへ派遣するなり。然れども輸入以後歲猶久しからず、國民樂は制定せられず、東西音樂の調和ははかられず、聴くもの多くは風馬牛相及ばざらんとす。音樂改良の聲は屢唱へられたり。然れども果して何等の點にまで其効果を收め得たりや。「芙蓉の峯」を「紅葉賀」に改め、「江の島の貝

盡し、「越後獅子」の田舎訛りの邊を改削したりとて何かあらん。音楽家なるものは、國民の趣味をして向上的行進を致さしむるに力めざるべからず。同じく是れ下里巴人の調なり。然れとも我等は「思ひ出すとは、忘るゝゆゑに、思ひ出さぬは、忘れねば」「よしや嘆かじ、叶はぬまでも、定めなきこそ、浮世なれ」「よしや今宵は、曇らば曇れ、逆も涙で見る月を」「住めるうき世に、思ひの増すに月と入らばや、山の端に」の弄齋節、「心細くも、燈し火ふけて、待つは命の、消えもせず」「いとゞ寂しき、寢ざめの床に、涙なそへぞ、ほとゝぎす」の投節、「恨みぬる夜は、夢のつきなく、また恨み、どうやらかうやら明けて、見し面影の、いづれ夢やらうつゝやら、どうやらかうやら明けて」のわきて節、若くは本調子に於ける「ふせ屋の月」「三また川」「逢ふと見し」の如きを取て、之を今のホウカイ節、ストライキ節に比す。何ぞ其歌章と節付けと調子との二者霄壤雷ならざるや。

國民の趣味年と俱に墜落し、斯る歌謠をして燎原の火の如く跋扈せしむるが如きは、我樂界の恥辱なり。樂界の志士は奮勵して、國民の墮落を拯はずんばあるべからず。總べての國民と國立音樂學校との修むる所をして、隔てしむるは、音樂改良の本志にはあらざるべし。獨り日本舊樂の爲に悲むべきは、社會の賤めたる藝人妓女と相伴ふこと是れなり。希くは樂界の改革者をして舊樂をも併せ研鑽する所あらしめ、調和と融化をはかり、國民の趣味をして向上せしめんこと是れなり。今の樂界に於て果して此大任を負ひ得る樂人あるや否。

(XYZ)

『教育時論』第六〇五号、明治三十五年二月五日

音樂學校の和琴

音樂學校は、從來歐洲樂器の研究を主とし、日本古來の音樂に向つては頗る冷淡なりしが、音樂普及の上に於て、歐洲樂曲に強ひて日本歌詞を配したるものは、其調和頗る不完全にして、却つて沒趣味の感あり、爲めに歐洲樂は、我家庭には不適當の曲なりとの非難を招き、殊に小學校唱歌教授上に於て、著しき失敗を來したれば、昨年來西洋樂器研究の外参考科目として、先ず箏曲の練習を開始せし處、其成績頗る佳良にて、琴専門の生徒を出すに至り、尙ほ一方にはピアノ、バイオリン或はマンドリン等を用ゐて、日本曲譜の和聲調和を試み既に琴六段曲、新八千代獅子等は、公會に於て演奏し、殆ど成功の域に達したれば、更に歩を進め普通學校唱歌にも、日本在來の曲を根據として、之に歐洲曲を配合し、國民の嗜好に適應する曲譜を作らんとの議あり、尙ほ去月來朝せる教師、獨逸人ハイドリツヒ氏は、二十年間英京倫敦に於て音樂を研究し、最良のピヤニストたる名譽ありし人なれば、ケーベル博士、ユンケル教師と相待つて、器樂の發達には、大に新生面を開く可しと云ふ。

『音樂新報』明治四十年五月号

音樂趣味の向上

音樂學校本年度の入學生と入學志望者の注意

近來我が國民の趣味性の次第に向上したる結果、美術に對する嗜好の益々盛んならんとするは喜ぶべきことなるが、上野公園内なる東京音樂學校の如きも昨年來入學志望者の激増を見たる由にて本年

の入學試験は去三月二十七日より一週間行はれ受験者三百四十九名ありて其の中合格したるは僅かに六十九名に過ぎず

〔つづいて女子の合格者名が記載されているがこれは略す〕

此の中乙種師範科の入學者中に清國人季變義あり從來神田一ツ橋なる選科には清國人の入學者ありしも上野の本校に支那人の入學したるはこの季變義を以て始めとなす由尙以上の入學者は學術技藝は勿論体格にも合格したるものなるが學術技藝の受験のむつかしきは勿論なれど同校は特に体格検査に重きを置くものにてそれも容貌にまで及ぼし、腋臭等にも深く注意する次第にて昨年の如きも學術技藝に優等なりし一生徒ありしが体格に於て不合格となりしより其生徒の家兄は早速校醫赤井氏方に赴き不合格の點を問ひ合はせたるに全く腋臭の爲めなりしと云へり、尙其他呼吸氣病、耳鼻咽喉の良否には最も注意せらるゝこと勿論にて餘りに小柄のものも又不合格となるべしされば今後音樂學校に入學せんとするものは豫め醫師に就きて体格検査を受け其の体格或は容貌が音樂家として適當なるや否を熟考すべしと云ふ

『帝國文學』第十三卷九号、明治四十年九月

新音樂學校長に寄する書

八月三日の樂家懇親會には輕井澤に起臥いたし居り候て不參、其後いまだ御面語の機を得ざるは遺憾に堪へず候。その節申上げむと存候ことども下に記して貴覽に供し候。もとより淺學無識の小生ことに專攻は文學のかたにあり樂壇の事象に暗ければ誤解も少なからずと存候が、其邊はよろしく御見逃がしありて微意の存ずるところ

を汲まれ候へ。

天才なればや、世に藝術家ほど偏屈なるはこれなく候中にも、音樂家は稍ともすれば感情にのみ走りて大量を欠き候ため、私情を差狭みて中傷陥穽を事とし、淺ましき暗闘に暮し候女々しき輩中々に多しとのことに候が、貴下は今その音樂家の淵藪たる唯一直轄學校に長として御來任あり、小生等ひそかに貴下の技倆を頼みに、樂壇の前途心強く存ぜらるゝこの頃に候。今日樂界の事象は未だ整頓の時代に入らず、着手勃興を待つもの多きはつとに御承知の如くに候が、この時に際して西歐樂院の長に多き純樂師を迎へずして、貴下のごとき趣味好尙の廣く且つ高き良事務官を戴き候こと、眞に適材を適處に置くものとしてうれしきに堪へず候。

今日文藝の進歩は目覺ましきものに候ふを、獨音樂のいたく他の藝術に遜色あるは、古來國民性情の然らしむるにもより候はむが、一面東京音樂學校に幾多飛躍の地存ずるを思はしめ候。凡そ音樂學校が兎角退嬰主義に落ち、進んで新現象を生み社會と交渉せしめて樂界の進運に寄與するところ少なりし原由は、一は卒業生の數少きにも依り候はむが、小生は女性を樞要の技術監に置きたるよりも生じたること、愚考致し候。古來女性に大文藝家なきは申すも愚かに候が、わけて現代の如き日に、時勢の推移速かなる時期にありては、新らしき事業に猛進して成敗を意とせざる少壯男子を以て自由に事を爲さしめ候方、何ぼう樂壇の爲め効果あるべきと存候。亡びゆく古樂の保存に對する事業、新樂製作に關する事業、歌劇試演の事業などを始め、目前にひかへ居候もの教知れぬまでに候この時にあたりて僅か一人の女性を海外留學に赴かしむるなどは誠に笑

止千萬のことにて、よろしく少壯有爲の樂人せめて四五、暫らく海外に派遣せしめたく候。この程新たに成立ち候『帝國音樂會』の第二回演奏に臨み、若き樂人の殊勝なる研究のあとを見候ふに、その著るしき進歩、その眞摯なる態度、ゆめ／＼わが一流の女性樂人に後れまじく、否寧ろ女性の及びもつかぬ點多々有之、小生は無限の喜悅を以てその宵をおくり候。ひとへに形式の末技巧の端にのみ關心するは女性の常にて、深奥なる性格美たとしへなき理想美の體現にいたりては、到底女人のことにあらずとつらく思ひめぐらし候。

日本に唯一なる上野樂堂の見すばらしさも何とか致したくパイプオルガンの一つ位は觸れてもみたく候へど、それは又戦后經營の向の御都合もやと御察し申し、暫らく差ひかへ候が、止み難きは海外名手聘用のことに候。勿論小生は只今雇聘の外人をもてあながちにそのわざ採るに足らずと申すにはこれなく候が、凡て事に慣るれば隋容の生じ易き習ひ、さらでも響なき絶東に生徒相手の數年を送り候ては、餘程藝術に精進いたすものならではつひ樂會の折樂壇に登りて聽衆の外國婦人とほくそゑむに至るが世の常、況してや久しきにつけ何かと情實の湧き出候て、樂界發展に妨げ致すこと無きにも候はず。又事實西歐には優れたる技倆の博士雲のごとくに候へば、その清新の想ある新らしき意味ある人を抜き候はず、其一事にても樂界の面目は確かに一新致すべく候。

これまで學校唯一の事業として僅かに春秋二季の樂會に候が、當節は一時ほどの熱誠を認めがたく、存外の出來榮に終り候こと珍らしからず、わづか年二回ならば今少し習練の巧を積みたたく、この程

の出來榮に候はゞ年四回は出來うべくと存候。その折にいつも驚かれ候は歌詞の拙さ加減にて只今の歌詞は失禮乍ら達者なる中學生にも及ぶまじく、いつまで新體詩創始時代の調に甘じ居られ候や御察し下されたく、聲樂の妙手も大口開きて『あはれ悲し』など、唄はれ候ては思はず涙うかび候。

歌劇試演につきての可否は最早問題と致す時期にはあらずと存じ候。中には歌劇試演を風教問題にいたす手合も候とか聞及び候が飛んでも無き事にて、いつも乍ら西歐の事象に盲き似而非道學の人に困りはて候。歌劇は多數の合唱、合奏を獨有せらるゝ貴校の如きが卒先事をなす義務有之、當今劇壇には未だ形をなさざるに既に俗惡に落ちて復た救ふべからざる壯士芝居と舊時代の遺型に甘んずる舊劇と、共に久しく人心をつなぐものにあらざるは理の當然にて、この秋に當つて歌劇新聲の興起はまことに天下を救ふものに候はずや。

あゝ樂壇の前途多事多望、貴下の施設にまたずして又何れにか至囑いたすべき。云はむとするところ猶ほ盡きざれど余は、次信にゆづりここに蕪辭ならはざりしを謝し候。終に臨みて切に貴下の自愛を祈る。(八月二十七日幽絃郎)

『讀賣新聞』明治四十一年八月九日

音樂學校取締方針

世上兎角の批難ある東京音樂學校職員生徒の風紀取締に關しては當局に於ても之を看過すべからざるものと認め福原専門局長湯原校長等協議の末大要左の方針にて之を取締ることに決定したる由

△入學者の素行を一層嚴重に審査すること △費用の許す限り寄宿舎の設備を完成し多數生徒を收容して之を取締ること △現在の教授生徒中素行如何はしき疑あるものに對しては既往に溯りて充分の調査をなし相當の措置をなすこと △今後同校の風紀を紊亂すべき恐ある職員及生徒は假借なく相當の處分をなすこと

『日本新聞』明治四十一年八月十七日

音樂生の風紀 (音樂學校の大刷新)

上野音樂學校にては兎角藝術を教ゆる場所に得て有勝なる男女風紀上の問題久しき以前より人の口の端に上りて世の取沙汰も日を逐ふて仰々敷なり竟に文部當局者も流石に捨て、は置けず昨年新に湯原氏を聘して専ら其刷新の任に當らしめたる次第なりしが先づ同校には**校友園遊會**と云ふあり、こは男女卒業生が懇親を結び舊交を温むるを以て目的とする者、各青春の血熱せる妙齡の男女一堂に會し手を握り合ひて樂しき談笑に時を移すは愚か、餘興の催ふしなどには兩性入り混りての随分際どき仕草もあり心あるもの暗かに眉を蹙しなり次ぎは**修學旅行**なるが之は春秋二回の催ふしにて男女出發の日取を異にし校門より啓立の際は一は東し一は西するの風を示せど途中は必ず或る場所に落合ふこと豫じめ打合ありてする事なれば豫期の如く旅先にて愈々落合ひし曉には恥は掻き捨てと大童に成りて思ひく々に双々の組を成しこを先途と睦み遊ぶ様連も是が規律ある官立學校學生とは受け取れざる程なりき、又**音樂生の住所**は下宿にまれ、素人屋にまれ、日がな夜がな、時さへあれば或はオルガン或はヴォアイオリンなどの彈奏を爲す爲め他の學生は

勉強の妨げとなり多くはホウ／＼の体にて逃げ出すを例とせり、されば彼等の居る場所は概ね人目を避くるに好都合となりて如何なることをも爲して憚らざるに至りたるものなり、斯る弊風ありしが故に今回は當事者も苦心の末一方には學生監を置きて嚴重に學生の風儀を取締り校友園遊會は男女別々に開くこととなし修學旅行も全然兩性を區別して眞面目なる修學的旅行の實を擧げんことを期し且春秋二季其他折ふしの音樂會にも男女の**合奏を廢止**することに斷然一決して夫々實行に着手すると共に一方に**寄宿舎**を設けて散宿の弊害を防遏するの計畫もありと成し何れ來月上旬各派領袖を集めて協議を開く事とせりと

『やまと新聞』明治四十一年九月一日、二日、三日

男女學校評論と題して三日間にわたり、東京市内の東京音樂學校、女子音樂學校、東洋音樂學校、女子体操音樂學校、東京音樂院、女子音樂傳習所、東京音樂會などについて短評が載せられた。その中から東京音樂學校に関する箇所を引用する。

△音樂を授ける所は市内のみにても三十有餘あるが一々此等を評する暇がないから東京音樂學校、女子音樂學校、東洋音樂學校、女子体操音樂學校、東京音樂院、女子音樂傳習所、東京音樂會等に就きて短評を加へて見やう、

△東京音樂學校の事に就いては我三面子が忌憚なく實際方面と組織方面とから痛快なる三十棒を下した事がある、一種の伏魔殿と見做されてゐた本校は之れが爲め一大改革を行はるる様になつたのは音樂界の爲め慶すべき事である、

△本校は一種の情弊が伏在してゐて通常の校長では到底思ふ事は斷行し難い、現湯原校長は學問も有り行政事務にも長けてゐる人であるが其處置振りを見るに齒痒様な事がある、此度新聞に出た教員及び生徒の醜的行爲は事實である事は證明が出来るのであるから相當な處置をなすべきであるに未だ思案に暮れてゐる様な始末である、此點になると前大島校長の方が勝つてゐる、

△幸田延子女史は本校に少なからざる功勞のある人で又藝術家として尊敬すべき天才を有してゐる、併し教育家としての品性人格は絶対に非認せざるを得ない、教育家養成主義たる本校に斯の如き人を置くのは害あつて益がなからう、女史が退けば本校否我音楽界が如何に發展するかは言を俟たずして明である、其理由は茲に説明せずとも既に世評の存する所であらう、

△道徳上のみならず法律上の罪惡ともなるべき行爲をせる人が教員中に四名あるがそは茲に言ふべき事でないから省略する、併し教員中橋絲重、村松秀子、の性格は言語同斷である事を述べて置く、此他にも十數名の注意人物がある、當局者の手際を今暫らく拜見しやう、

△近頃教育界の一大問題となつた爲め俄に本郷西須賀町へ一家を借り女子の一部を收容すべき寄宿舎を設けた、官費の男女學生を自儘に下宿せしめ世間から迫られて初めて氣が附くとは實に頓間な話ではないか、音楽家が技藝のみに心を要するのは一面より云へば結構であるが社會に疎遠な事は驚く程だ、少なくとも教育者としてコンモンセンスに足らぬ所がある、

△音楽は國民に普及する必要は十分あるから増々發展させねばな

らぬが今の儘では望まれない、教員養成科は高等師範學校に併置させ技藝養成科は本校と陸海軍々樂隊及び宮内省の雅樂部を合併し大音楽學校とするがよい、こは經濟上大利益があるばかりでなく音楽發展上非常な得策であらう。今の様に教員養成か藝術家養成か知れない教育主義では帶には短し禪には長く到底完全な事は望まれない、

『東京朝日新聞』明治四十一年九月十四日、十五日、十八日、十九日、二十五日

憂ふ可き音楽界

▽百弊は女子美權より

この兩三ヶ年音楽の勃興と共に、早くもいまはしき暗流のこれに伴ふを認め得るは藝術界の爲め甚だ痛恨の事たり。音楽學校腐敗の惡評判漸く世の注意を高めて、心あるものの齊しく憂慮するに際し、和洋樂界の總てを通じて、弊風頻々と相踵ぐを見聞してこれを世に訴へざるべからざる如く立至りたることは記者の尤も遺憾とするところなり。吾人は猶豫なく此弊風を除き道の振作を謀らんには、先づ斯界最高の府たる音楽學校なるものより取懸らざるべからず。聞くところに據れば同校は既に世の物議に鑑み英意それが刷新に努めつゝありと、果して然れば他に憂ふる所もなかるべしとは雖も、單に寄宿舎の編成や男女學生の分離位にて満足すべき秋にあらず、それ以上甚だ急務なることの頗る多かるべきを思ふ。泥棒を見ての上の繩詮議にてはこの大急務に對して何にもならぬこととなり了るべし。記者つらく考ふるに、斯界振興の最大緊急問題は、須らく同

校教師の品性陶冶にあるべし。これが實行を見ざる間は臭いものに蓋にて到底何時まで立つても駄目なり。世の識者口を揃へて曰く、音樂學校不振の基は百弊の存在にして、百弊の湧出は婦女弄權に源すと、左もあるべし。技に於て數に於て男教師に優るの女教師に伴ふ弊風は、常に天下樂界暗流の發源地となれるは誰しも首肯し得らるるところなるべし。ああ尊きこの大藝術を婦女子の手にのみ委して、男子拱手傍觀して沈黙すると云ふは由由しき國辱にあらずや。上これを行つて下皆倣ふの諺の如く、上野の杜蔭の化物屋敷を最高の府と仰がざる可からざる斯界の運命は、實に言ふに忍びざるところにして豈心外の至りならずや。(つゞく)

憂ふ可き音樂界(二)

樂界最高の府たる音樂學校に、根本的刷新を施すべき方法を云ふに先だち、同校が執り來りし從來の遺口に就いて一言せざるべからず。同校が執りつつある生徒教育土臺の方針は、専門の藝術家を作るべき點にあるか、將た教員養成の目的が主なるか、その邊甚だ疑を挟むべき餘地あるなり。尤も内部の編成には本科なるものを置くは事實なれども、これまで出した卒業生の成績を見るに、大抵師範科卒業同様の中初等程度の唱歌教員若くは自營の音樂初歩の指南者にして、華々しく藝術界に活動せしを見ず。また翻つて本科志願者及びその卒業生を見るも、將來に藝術界に立たん目的を有する程の殊勝なる意氣あるもの果して幾人を數へ得べきか、これ實に心細き疑問にして、或は皆無と云ふも不可なるべし。假令多くの中にはこれら殊勝者の一二人ありとも、同校はこれに向つて甚だしき障害と

壓迫とを加ふべきは必然にして、今日に至るまでの幾多の實例之を證して餘りあり。同校出身者にして若しこの殊勝なる意志を斷行せんとならば、勢ひその母校との干繫を絶たざるべからず。これを絶たんには困難百出遂に意を屈するの已むを得ざる場合となるべしこれ甚だ憂ふべき現象にして須らく最先に刷新を要すべき點にあらずや。同校がこれら殊勝なる卒業生に加へし不要なる干渉と厭ふべき事實の纏綿とは、實に樂界の裡面に激烈なる勢力を以て流動しつゝある大暗流にして、道の不振も風紀の紊亂も皆これに依つて生ぜしを知らば、何人も不問に附すべからざるを首肯すべし。あゝ國民の膏血より出でたる國庫巨額の財は、天下藝術の振興を圖るべき名目の下に、徒に私の情實を以て浪費せられしかを思へば、痛恨これより甚だしきはなし。明治二十一年音樂取調所^{委員}を擴張して設立せられし同校當年の教育方針は、眞逆かゝることにもあらざりしなるべく、累年根を固うせし宿弊の今や藝術死活の問題に及ぶ、國家の恨事何事かこれに如かん、二葉のうちに刈らざりし禍は遂に斧を用ひるに至りたるなり(つゞく)

憂ふ可き音樂界(三)

▽無駄な音樂學校

斯の如く音樂學校の方針なるものは、吾人の期待する如く一國の藝術に參する専門家の養成にはあらずして、下級なる唱歌教員を製造する所に止まるが故に、土臺より吾人等の考へと反對のこと頗る多し。政府は音樂を以て藝術の一科と見做さず、國家前途の計に何等の注意を拂はずして、斯の如き趣味の程度の低き唱歌教員の養成

をのみならずならば、他に亦法ありて、高等官三等の教授も不要なれば外國御雇教師も無駄な話なりとは雖も、何處迄も音樂學校の名を以て國家音樂の府を標榜する以上は、吾人は筆を極めて同校の腐敗と無能とを世に訴へざる可らざるなり。音樂學校が教員養成を主とするに止まると云ふことは、目下の遣口を見て十分明瞭にして、一より十までその寸法を以て行はるるは何れの方面より云ふも證據立てらるるところなるが中に尤も感心出來ざることは、其側一派が他に出でゝの演奏を厭ふことは是なり。今之を同校の女王幸田延子女史に就て云はんに、女史の常に曰ふところは、他に出でゝの演奏は藝人らしいから可厭とのことなり、女史一人のみならばそれにてよしとしても、女史の徹頭徹尾其部下及び同校出身者に迄これを拒むるは、吾人其何の故なるかを知るに苦む。また假に女史は他の演奏には斷じて應ぜざるの一點張ならばそれにてよしとせんとせんも囑託者に向つて何百金の要求をなし、または同時に出演する人名を糺して、遂に出金の額に應ずる能はざるを嘲り、或は同校の系統を引かざる他の音樂家を誹謗し、果は音樂は戯技にあらずとの言譯を張つて、樂界將來の運命を顧慮するにもあらねば、國民目下の生活程度をも度外に置くなどは、莫大の國庫の財を受け、我藝術界の爲め大に國民の期待を身に負ふて、數年異邦に滞まりし上歸朝後は榮遇一身に餘りつゝある、大責任を負へる女史の言とても思はれず。今女史が胸裡を割つて見ば、他に出でゝの演奏を嫌ふは何の理由もなかるべく、單だ藝人同等に誤解せられては内職たる高貴の御出入等に差間へを來たすの點に外ならざるべし。これ等は婦人の淺智惠として嗤つて過ぐべきも、校裡に在つては權を専らにし、外に向つては一流

の出演を拒むが如き等は不埒なり

憂ふ可き音樂界(四)

▽宜しからぬ手本ばかり

幸田女史に次ぎ傲慢不遜にして小癩に障るのは御雇教師ユンケル、ハインドリツヒ二氏とすこの中ハインドリツヒ氏はまだしもなれどユンケル氏に至つては高雅なる藝術に携はれる人としも思へぬ程品性の下劣なる人なり我國は嚮にチツトリヒ氏を送りて其の代りにかゝる人を迎へ我樂界の前途を委ねざるべからざるといふは情なき限ならずや此の人の幸田女史との關係云々または梅毒云々は別問題として演奏に何百金を出せなどは幸田女史以上にして他人の出演を拒むも亦同様たり而して自己の名人なるを自稱する方法としては下劣極まる言動を以て黜すことを意とせざるなどは他所の看る眼も氣の毒なる許なり先づ一例を示さば數年前何某といへる有名なるピアニストの來遊せしことありきユンケル氏その演奏の傍聽席に連りて同席の我が同胞に向ひその技を評して曰く「あれ位ならばお幸せんでも出來ます何大した技でもありません」と何ぞその他に排して自己の地位を高めんとする方法の陋劣なるや、その意の存するところは己が教へし安藤幸子女史だに既に渠に匹敵する位は容易なることなれば況んや予われをやと云ふにありて間接に自己の大家たるを誇りたるは明かなり或社の記者の如きはそれを眞に受けてその儘麗々とユンケル氏の評を載せたるさへありき何ぞ其滑稽の甚だしきやユンケル氏の如きは所謂鳥無き里の蝙蝠に過ぎずして自國に於ては第二流中位の上にも出でざるの人にしてさる外國音樂通は伊太利の乞食

にも氏以上の腕の者ありとさへ云ひき味ふべきことならずやハインドリツヒ氏も時には斯かる言を弄するを何とも思はざるの人にして「私は横濱一ではありません、日本一です」と我國民の耳は如何に幼稚なりと雖も未だ同氏のピアノ位に驚かざるべし此等は禮遇を以て厚く迎へられて我樂界に重き責任を有する指導者の言葉と云はるべきか吾人は頗る我樂界將來の運命を思つて憂慮措く能はざるところなり要するにこれはその一例のみ裏面に伏在する幾何の事實は即ち識る人ぞ知るところにして今更喋々を要せざるなり畢竟同校の上立つ或側は皆この筆法にて善からざる手本を後進者に示しつゝあるなり宜なる哉中學をも卒業仕切らざる青書生の三年忽ちにして大藝術家に孵化するの速かなる世に毒を流すの弊の大なるまた推して知るべきのみ(つゞく)

憂ふ可き音樂界(五)

▽速かに陋習を脱せよ

音樂學校内部には斯の如く幸田女史の鼻息を伺ひ常に其覺目出度からんことを力むるもの多く其弊遂に生徒間にも及ぼし成績素行の如何等に關はらず、同輩中に勢力を得んとしては女史に諂ふもの多き故に世には逸早く賄賂公行等の好ましからぬ噂あるに至りたるなり然れども校内多數の教員間には幸田女史の一派に反對の位置に立てるもの現に無きにあらず即ち風琴専門の歸朝者島崎赤太郎氏はその一にして技術の點より抱負の點より優に幸田女史に拮抗して異なる意見を實行すべき力量は十分ありとは雖もそれにしての島崎氏はあまりに好人物にして加ふるに新參と云へる點に控目を採れるが如

しされば世間は幸田女史と衝突ありしかの如く訛傳せしことまた數々にて島崎氏主となりて校の革新を行ふと云ひしも幸田女史辭職の風聞も皆この暗闘より發する煙の末に外ならず島崎氏は樂器店共益商社に深き關ありて校外の斯界にも少からぬ勢力を有てる上に猶後方には北村季晴氏の民間にあるありて一人當千の味方亦少しとせず暗闘係の主力を以て目指さるゝも亦故なきにあらざるなり北村季晴氏は同校出身の異數なる技術家にしてその邦樂研究の態度も作曲に著書に樂界表面に活動する上にも常に母校と意見を異にして反對の位置に立てるは世の既に知るところなり北村氏の如きは同校幾多の出身者中稀に見るところの頭腦を具へたるの人にして既に母校の頼み難きを看破し獨立研鑽の位置に立てるなり殊に數年前田中理學博士の歸朝ありて邦樂研究に一道を開かれしより以來北村氏に加へて世には鈴木鼓村氏の邦樂保存の旗學等起りて同校の迷夢一時に覺め邦樂調査委員の任命となり着々其緒に就きたるの感はあれども内實は嚮に邦樂保存の建白に冷々の態度を執りたる同校の方針と大差なくその活動も亦甚だ世に著しからず依然として邦樂を輕視するの風あり之を要するに音樂學校は何處までも唱歌教員の養成所に過ぎずして専門藝術の士を作るべき所にあらず教職は皆他人の己れに擢ぶるを嫌ひ自己の天職を忘れ我邦樂界の前途にも鑑みず啻に官職を恃み貴顯に出入して自ら得たりとするの態度は吾人の少からず慨嘆に堪へざる所なり、偶北村氏、澤田氏、小松氏の如き頭腦を有するの人をその校より出すもこれを適當に用ふるの術を知らず徒に平凡なる同型の教員を製造して以て足れりとするは惜みても剩りありと云ふべし今や學界機運の向ふところ已に昔日の加にあらず須らく音

樂學校たるもの百弊を除き方針を革めて自ら斯界の光明臺たらんを吾人は切に希望して罷まざるところなり(完)

『毎夕新聞』明治四十一年九月十一日

幸田教授の進退

兎角の世評姦しき彼の東京音楽學校首席教授幸田延子女史の進退に就ては或は論示退學たるべしとか辭任すべしなどと傳へられしも未だに其事なく女史が去就に就ては目下殆んど五里霧中の有様なるが女史が技倆に對しては已に後進に優に女史を凌ぐものあれば又校内に於ける人望も今や一向に振はざるより假令女史にして退職すとも同校の教授上には更に些の差支へを生ぜざるは明かなるに湯原同校長が未だに女史に對し斷然たる處置を取らず全く其辭表の呈出せらるるを待ち居る如き有様なるは女史が同校に於ける其勢力を恐るゝに起因するものにて實に女史の勢力と云へば同校職員生徒の大部分に崇拜者を有し女史が一舉一動自ら校内を動かす如き大勢力にて若し湯原校長にして斷然たる處置を爲すに於ては其結果先年學習院女學部が前下田部長辭任の際惹起したる騷擾以上なるべしとの考へより未だ何等の處置を爲さざるものなりとて目下頗る校長の不能を鳴すもの多しと云ふ

『東京日日新聞』明治四十二年九月十日

音楽學校の廓清

幸田教授の辭職、湯原校長の手腕

東京音楽學校教授從五位幸田延子(四十)は就職以來十四年の久

しき間教鞭を執りピアノとして我樂界に其名を驅せ貢獻する處亦尠からざるもそれと共に常に音楽學校紛擾の禍根をなし夙に一部の識者をして顰縮せしめたるが遂に十日の官報を以て其帷幕武島文學士と共に依願休職を發表せらるるに至れり。

△湯原校長の談 湯原校長は島崎教授と相對して椅子により往訪の記者に幸田教授休職の顛末を語るらく幸田教授が女の身をもて永く好位地にありては兎角の世評五月蠅ければ之を避んが爲め且は後進の道を開くため辭職せむとて昨年七八月以來再三予に對して辭意を漏したるも後任者の關係もあれば予は其時機にあざる旨を告げて留任を説きたるが本年四月獨逸よりピアノストロイテル氏を招聘し又ピアノスト神戸教授も佛蘭西(佛國留学生は女史を初とす)歸朝したれば目下當校に三名のピアノストを要せず且幸田教授の辭職を迫る甚急なるを以て學校にても已に留任の必要を認めず雙方の都合最も宜かりしを以て今回之を納れしなり尤も幸田教授は進んで辭表を提出せむと云ひしも俸給等の關係もあれば二三日前文部大臣に是を計りて休職とせしなり、

△不必要的武島教授 尙ほ武島教授の休職は今回授業規則の變更により音楽學校をして技藝本位と爲したれば從來同氏の受持に係る國語は他の學科に合併して教授することとなりたれば不必要と謂ては語弊あるも兎に角武島教授を煩す可き學科なきため休職となしたるものにて武島教授と幸田教授とは殆んど時を同じうして本校に就職したれば兩人が同時に休職の命に接したるを見て世人は何等か校内裏面の關係によつて然るにはあらずやとの疑念を抱くものあらむも是れ只教授規則の改正の結果にして何等の意味なしと先づ思はれ

たし。

△今後の動搖と廓清 音樂學校風紀の廢頹と校内教授間の軋轢は從來赴任校長が常に其頭腦を憚したるも一も成功せざりし所なるが今回湯原校長が幸田教授及び武島教授を追ふて廓清の第一歩に着手したるなれば従つて追々と教授間に動搖を見るは免かれざる處なる可し柴田助教授は藤井軍醫との離婚一件以後病と稱して出勤せず已に八月中旬辭表を提出せし由なれば此際當然文部省に於ても之を許容すべく幸田教授の實妹にして常に兎角の批評の絶えざる教授安藤幸子及び其大達者なるユンケル教授の進退は此際最も注目し價ひするものあり一葉落ちて天下の秋を知る音樂學校の廓清遂に成らむ因に幸田女史は皇太子妃殿下竹田宮家を始めとし徳川家伊達家住友家等にピアノの教師たれば同校を去るとも何等の痛痒も感ぜられざる可しと云へり

『帝國文學』第十五卷二号、明治四十二年二月

不見識なる音樂家

雜誌『趣味』の新年號に、幸田^{△△△}延子^{△△△}女史の『音樂雜話』なるものが出てゐる。幸田女史と云へば、疑もなく吾が國洋樂界の先驅者である、大家である。其の人の口から音樂談を聴くのであるから、吾人は多大の期待と尊敬とを以て一讀した。而かも讀み終るに及んではあまりの無見識無定見に驚かざるを得なかつた。吾が國に於ける音樂藝術發展の歩調が、とかく他の藝術に遅れ勝なもの、さればこそと點頭かれる。

日本音樂の將來如何と云ふが如き、音樂家たるものゝ當然考へ置

くべき筈の間に對し、女史が一家言として何等の答案をも與へて居ないのは、いづれ深遠なる見解があつての事だらうから、敢えて茲に啄を容れぬが、「只、何となく左様云ふ氣が致します」と云ふ前提を以て、「當分は如何したつて西洋音樂許りになる筈はない」と、プロセスなしの結論を與へられたのは恐縮する。氣分や心持で凡べてを律するとか云ふ近代批評の筆法で行かれたらしいのは、成程豪いが、其の論旨の貧弱にして透徹せざること、斯くの如きは蓋し少なからう。これでは宛然小供のヤンチャだ。否、夕やけ小焼明日天氣になあれ！と叫ぶ小兒の言動には、より多く理路の整然たるものがある。

それは先づ見道がすとして、「日本でも立派な作曲家が出来ます様になれば大變結構で御座んすけれども、只今の處ではそんな望は御座いませぬねえ」と言はるゝに至つては、到底無責任の誹を免れぬ。吾國現時の作曲界は、女史の云ふが如く、爾かく絶望的なるものでは斷じてない。獎勵保護の如何に由つては、近き將來に於いて、國民樂勃興の機運に接せぬとも限らぬ。吾人の眼に映じた範圍内のみでも、作曲の一つも試みやうと焦心して居る人が随分ある。

東儀氏の『常關』にしろ、小松氏の『靈鐘』にしろ、其の成功不成功は兎に角に、吾が樂界の過去に於ける産物である事は疑なからう。であるのに、作曲を得る望なしと言ひ切つて了はれるのは、強ひて望なくするのと同じである、折角燃えむとしてゐる火に、水を灑ぐのと何等の異なる所はない。凡そ天下に斯くの如く無謀なる事があらうか、少なくとも女史の言の如きは、不完全ながら比較的長篇の作曲に筆を染むる所あつた人々に對して、非禮の言たるを免

れまい。今少しく慎重の態度を取られたら可からうと思ふ。かう言ふと女史は、あんなものを音楽と云ふのは余りに嗚呼がましいと言ひ退けられるかも知れぬが、音楽の搖籃時代に、何處の國だつて人間が神様でない以上は、完全なる作物を産する筈がない事を考へて見ねばならぬ。女史等が今日厚化粧の技巧を加へて、現を抜かしてゐられる所謂天下の名曲も、其の昔は近づくに難きものであつたに相違ない。斯くの如きは勿論、云ふまでもなく明々白々なる事實だ。

また果して女史の云ふが如く、望なきものであるにしても、音楽學校の覇權を握つて居られる女史一個人は、少なくとも望あるものでありたいのである。否あり度いではなく、無くてはならぬのだ。然らずんば女史の存在も甚だ危い。女史は音楽學校の爲めではなく、我國音楽界の爲めに、遙々洋行して來られた筈の人である。然るに其の人が四十二年の今日に至るまで、一の責任ある作曲をも公にしないのは、吾人以て不可思議とせざるを得ぬ。既に音楽學校と云ふ以上は、單に演奏家養成所として満足すべき謂はれない。吾人は如何に考へても、女史等に新しい作曲家を育て上げて貰ふ權利があるのだ。

然るに女史は、「私共は從來の名曲を十分に復現する事が勢一杯の仕事である」と稱して、暗に作曲の意志なき事を表白して居られる。一人の演奏家として見るならば、寔に以て結構な御覺悟である。然し吾人は世人の言ふ所に従ひ、女史を一人の音楽家として遇せぬばならぬ。既に音楽家と云ふ以上は、演奏家たると共に作曲家であり度いではないか。凡そ藝術の研究が創作と賞翫との兩方面を

兼ねなければならぬと云ふ原則は、藝術の第一頁を窺つたものであるなら、誰でも知ぬいて居る事で、苟くも樂界の牛耳を執つて居る程の女史が、此の原則を没却して居らるゝのは、不用意と言はうか、不見識と言はうか、吾人遂に啞然として驚かざるを得ぬ。勿論演奏と雖も、多少の主觀的態度が混在して居る以上、或る意味の創作とはなり得るが、歸するところ翻譯音楽たるを免れぬ。但しそれも社會に取つては必要であらう。然し苟くも一國の藝術家たる位地を占めてゐる人が、國民藝術を建設するの舉に出でないとあつては、吾人は純然たる國民的色彩を那邊に求むべきであらうか。かう考へ來ると、最早一音楽家としての女史が以上の態度を是認すべき餘地がなくなる。こんな事が分らぬ女史でもなからう。

單に作曲の事のみに限らず、今日に於ける音楽家の大部分が、靜思的乃至考察的態度を缺いて居るのは、吾人が常に慊らず思ふ所である。女史等が黙々として、あたり二十年を夢裡に過ごし來たつた間に、文學であれ繪畫であれ、其の姉妹藝術は幾多の新現象新傾向を胚胎しつゝ、茲に異常なる發展の跡を示した。然るに此間に於ける樂界は、果して幾何の効果を獲得したであらうか。尤も彼の陸軍々樂隊が、演奏會の始終をなしてゐた時代に比しては、上野の音樂會も確かに進歩したに違ひなからう。然し所謂器械的音樂の弊は、益々其の多きを加へて、技巧の上塗に陥らむとしつゝある今日、來らざる可からざるは音楽家諸氏の一大自覺である。現今の音楽家に説の聞かすべきものなく、歐州近代に於ける樂界の新傾向の如きも、反つて音楽學校以外の人もしくは純文藝の立脚地より説かれつゝあるのは、實に情ないではないか、無能ではないか。女史の如く

名曲のリプロダクションにのみ腐心して、只空しく一生を終らむとする人自身に取つては、以上の如き非音楽家的態度も可なる點があらうけれども、一般藝術界はそれを是認すべく余りに洪量でない。常に創作を出だし、傍ら將來の建設に怠らぬ音楽以外の藝術の手に對しても、申譯があるまいと思ふ。要するに斯くの如き藝術界裡にある音楽家は、内部生命の躍如たるものがなくては駄目である。

序でだから言つて置くが、假令女史が只演奏家の態度を持して、所謂名曲の復現を事とするとしても、在來の如く技巧テクニック一天張や、冷靜なる客觀的態度では徒勞だと知らねばならぬ。さらぬだに藝術に内在の滋味を求めつゝある今日、純客觀的なる技巧を以つて世に問ふべく世は余りに賢い、這般の技巧に藝術の永久性を覚めるなどは、勞して功なき事に屬する。で今後の演奏は、如何しても表情アウストロップの力に重きを置くと共に、獨創的技巧がなくてはならぬが、在來女史の周圍に行はれつゝあるが如き摸倣的模倣的表情は平に御免を蒙りたい。藝術的概念の不燃焼とか、讀書癖の缺乏などは、識者の云ふが如く、今日の音楽界に於ける通弊で、是等の缺陷を打破せむが爲めには、いくらか方法はあらう。要は作曲家が其の曲に對せしムウドを窺つて、これに個性的色彩を加ふる用意があつて欲しいのだ。今日吾人の接する演奏の多くが、些の同化なく醇化なく、只これ一の擬音に過ぎない觀があるのも、此の用意がなければこそである。吾人の言ふ表情とは、此の個性的着色ある表情を指すので、斯くしてこそ始めて音楽の眞を提へる事が出来ると思ふ。なほ此の音楽的表情に就いては、吾人また一家の見を有するのであるが、これは寧ろ問題

外であるから是に留め、茲に聊か女史及び女史と態度を同じうする人——無論あるまいが——の猛省を促して置く。

以上叙べ來つた所は、至つて明白なる事實乃至原則である。而かも吾人をして茲に之を反復せしむるに至つた音界一部の惡傾向は、抑も何人の責任に歸するのであらうか。改めて言ふ、音楽家自覺の機は、既に業に熟してゐると。
(無頭)

『報知新聞』明治四十二年十月四日

音楽學校の前途 (ハイドリヒ教授の激越なる公開狀)

東京音楽學校教授間の紛擾に關し同校ハイドリヒ教授は三日を以て政府當局者及び公衆に對し長文の公開狀を發表したり此の公開狀によれば教授は先づ自己が音楽學校に教職を奉ずるに至りし次第より更に同校の現狀に及び次で約一年前より最良の教材たる教員が解職せらるべしとの風説を傳へて後突如として柴田環ハコ氏が解職せられ更に九月には幸田延子女史か其職を退き續いて同月廿二日ハオレ・コエベル博士も亦辭表を提出したるは全く同校醜態を暴露したるものなりと斷じコエベル博士の辭職は如斯陰謀多き學校に教授としての責任を尊重する上に忍ぶべからざるものありしに依り畢竟するに同校の現狀は紳士として嘔吐の感あらしむ此狀態と紳士とは兩立し難きものにして此結果學生は此先如何に成り行ゆくべきかを知らず迷夢の裡に徘徊せしめ終に同校は早晚必ず徐々に來る滅落を防ぐ能はざるべしと激論せり之に對する當局者の回答こそ聞きものなるべし

『報知新聞』明治四十四年九月十九日

幸田延子女史の待遇

休職東京音楽學校教授幸田延子女史は去八日にて休職満期となり全く音楽學校との縁故絶ゆることとなりしかば宮内省にては東宮職御用係としての同女史の身上を詮考の結果同日付にて左の辭令を交付したれば女史は純然たる東宮職御用掛り(奏任待遇)たるに至れり

〔辭令〕

奏任待遇 東宮御用掛 幸田 延

『國民新聞』明治四十四年九月十三日

四名とも写真入りで報じられている。この記事で人名には右野が引かれている。

教師評判記(音楽學校の四外人)

○ユンケル氏〔写真〕 音楽學校の外國教師の中で最も勢力を振つて居るものは矢張ユンケル氏である、氏の藝風は一口に云へば寄席藝人風であつて品位に之しい憾みがある氏は今から二十年前飄然として横濱に轉げ込んだが饒倖な事には其翌日獨逸大使館に夜會があつた此機會を利用して報酬は何うでもいゝから演奏させて貰ひたいと申込んだ漸々許可があつて其會に出た時には燕尾服も無くて困つたといふ奇談もあるが當時の日本の洋樂界には無上の名手と稱へられ直様辻男や伊澤氏の取り持ちで音楽學校に入った二十年前の當時こそは又と得難い名手では有たらうが今は何うであらうか疑問である只オーゲストラのコンダクターとして適任であると云ふだけで技術

家としては宮内省のドボラウオツチ氏や此間米國へ行つたヴィネツチ氏の敵では無いらしい、が音楽學校の洋琴部ヴァイオリン部の振はぬのを氏一人の罪に歸するの或ひは聊か冤罪かも知らぬ

○ウエルクマイステル氏〔写真〕 氏は器用で世才「マヤ」に老けた人である其技は術綺麗に弾くと云ふので評判である風采の立派な白面美髮の好男子なので時々艶聞も聞かされる去年あたり音楽學校の女生徒に何うされたとか何うしたとかで一寸ゴタ／＼があつた去年の夏帝國劇場の樂器購入を委託されて母國獨逸に一寸行つて來たが其爲に八千圓ばかりの餘裕が出来たと云ふ音楽學校の本職の外帝國劇場へも出て居るし其外方々の教師をして居るので収入も却々多い其金はコセ／＼蓄て居るので今では餘程出来た筈専門はセロだがピアノでもヴァイオリンでも器用にやる一の才人である。

○ロイテル氏〔写真〕 年が若くて經驗の無い爲めに教師としては未だ批難はあるが技術家としては立派なものである世界を標準に取つての名手である人格の高い事も此人の偉い處でそれ等の處からユンケル氏等とは肌が合はぬユンケル氏はいつもウエルクマイステル氏と相提携して居るに對しロイテル氏はいつも一人ぼつちでやつて居る仙骨俗人に容れられずとは此人のことであらう。

○ペットオールド嬢〔写真〕 獨逸の新聞記者の夫人で夫と共に一昨年日本へ來て間もなく音楽學校へ入つた聲樂家である音楽學校では最初何の位までの聲樂家であるか所謂鼎の輕重が分からなかつたので一ケ年の契約で雇入れたが其後多少其の技術も認められ兎も角も聲樂家としては人の評判に乗る様になつた非常に勝氣の婦人で常に出来得る限り派手に暮して居るが神經質で感情に強い處から校内で

も仲間としつくり行かぬとか。

『音楽』第二卷四号、明治四十四年四月

卒業生諸子を送る

駘蕩の陽春に、花笑ひ鳥歌ひ、天地も亦自然の音楽を奏するに當りて、茲に我音楽學校の卒業生諸子の目出度門出を祝ふは吾人が衷心の愉快とする所なり。本年の卒業生は、研究科に五名、本科に六名、甲種師範科に三十二名、乙種師範科に九名ありて、其の數、例年に比して大差なし。但本年卒業の成績に付き、稍々注目すべきことは、過般實施せられし、甲種師範科の最後の一年に課せし、ピアノ科の成績の案外に良好なりしこと、同師範科より二名の獨唱家を出せしことなり。従來、師範科の器樂は、オルガンのみに限れるを、一昨年規則改正の結果、併せてピアノ、ヴィオリンを課することとなり。差當り試にオルガンの成績佳なるものを選び、最後の一年間ピアノを課せしに、右の如き案外良好の成績を示せり。此の成績を推して考ふるときは、第一學年よりしてピアノ、又はヴィオリンを専攻する生徒の卒業成績の、更に一層良好なるべきは、今より期して待たるべし。又従來は、師範科には、合唱のみあつて、獨唱なかりしも、一昨年獨唱専門の外國教師を得て以來、試に其の資質優れるものを選びて、之を本科の獨唱科に編入して、同じ教授を施ししに、これ亦豫期以上の良好の成績を收め得たり。要するに、今回の卒業生には、少くも其の技術上には、従前に比して、多少優れる所あるを認むるなり。然れども、卒業生諸子の前途如何んと云へば、彼のお定まりの式辭に戒むる通り、尙極めて遼遠なりと謂は

ざるべからず。就中、出で、地方の教職に就くものに至つては、豫め今より種々の困難と、戦ふの覺悟あるを要す。這般の卒業生が、先づ第一に案外の感をなすは、就職する學校が概して音楽に冷淡なることなるべし。音楽一點張りの専門學校より出て、音楽を一學科、而かも餘り重きを置かざる一學科として、授くる普通學校に入らば、何人も必ず其の前後の空氣に冷熱の差甚しきに驚くべし。職員生徒の中に、音楽に冷淡なるものあるは、マダシもなり。甚しきは、直に音楽を憎惡して、之を仇視するものさへこれあり。特に樂器に至つては、到底専門學校に於けるが如き、精良のものを得ざるは勿論、其の調律さへも、往々意の如くならざる場合多し。此の外、學校職員之列に入りたる以上は、授業以外に相當の雜務ありて、之が爲に慣れぬ仕事に心身を勞することも亦少しとせず。かゝる事情は、言ふまでもなく、初めて世に出づる卒業生諸子の、最も面白からず感ずる所なるべきも、さりとて、諸子の爲に、一切之を除き去るべき術なきは勿論、却つて、かゝる事情に打勝たんことを努むるこそ、教育家たらんとする、諸子の第一に盡すべき重大の責任ならんと思ふなれ。最後に、何人も殆んど思設けざることにして、而かも意外なる失敗の原因となるものあり。そは他にあらず、卒業生の髮飾形を見て、ハイカラなりとして、地方人民の、動もすれば之を指彈することなり。我音楽學校の校風の、一部世人の豫想に反して、極めて素樸なることは、能く我學校の消息に通ずるものゝ、何人も、之を認むる所なれども、而かも今尙往々にして、かゝる誤解の地方に存するを聞くは、吾人の最も心外とする所なり、然れども吾人の卒業生諸子を知るや、熟せり。諸子豈に其の前途に於

てかゝるタイもなき、區々の末節の爲に、其の大事の目的を誤るものならんや。往けよ、往いて各々爾が渾身の熱と誠とを、國より與へられたる、爾の職務に捧げよ。但東西南北、各々其の風土の異なるや、或は諸子の健康と相容れざるものあらん、諸子、請ふ自重して、敢て加餐を怠ること勿れ。

『音楽』第二卷五号、明治四十四年五月

新入學生を迎ふ

舊を送りて、分袂の恨、未だ盡きざるに、新を迎へて、握手の樂、新に生ず。浮世の風波に遠かれる學窓の下にも、離合聚散の悲歡は、自からこれあり。然りと雖も、去るもの去らず、來るもの來らずんば、學校生活の流れは、其の水腐りて、蟲こゝに生ずべし。故に、吾人は其の去るを惜むと共に、其の來るを喜ばざるを得ざるなり。同一人心に、此の兩様の情緒を存して、而かも其の統一を害せざるは、是れ人間精神の妙諦にして、其の守舊就新並び行はれて、相悖らざる所以なり。かくて吾人は、茲に滿腔の誠意を傾けて、新入諸子を歓迎し、併せて吾人の所懐を述べて、諸子の参考に資せんと欲す。

我が東京音楽學校は、或る意味に於ては、天下無類の學校なり。大學を始め、同種の學校は皆少くも一ツ以上あり。而して音楽の學校のみは、我が音楽學校の一ツに限れり。男女共學して、而かも個人教育を以つて、其の本體となすは、他に其の例なし。外國教師、其の教授の要部を受持つこと、是れ亦、今は他の學校に無き所なり。公開の演奏に依つて、其の成績の批評を公衆に求むるが如き

は、固より他の學校の、夢にだに想ひ及ばざる所なるべし。教授の責任なき囑託員の多きことは、我が音楽學校の一異彩なり。學科目の多種多様にして、教師の數、略生徒の數の三分の一に當るが如き、何れの學校にか、其の類例の見るべきものやある。而して諸子は、今や其の従前單調の普通學校を出て、此の一種無類の學校に入れり。其の何んとなく、心に異様の感起るべきは、固より當然の事なり。然れども諸子よ、或は思ひ惑ふことなかれ。我が學校には、其の組織の複雑なるが中にも、自から一貫の精神ありて存す。能く此の精神を會得すれば、諸子が辿り行くべき前途には、毎に晃々たる指導の光明あり。人倫の道を誤らずして、藝術の眞を求むること、是れ我が學校の精神にして、而かも此の精神は、各自生徒の心の奥に潜みて、陰然我が校風の基となれり。或は世間一部の人は、我が學校の外形のみを見て、これを以つて、毎に喧擾混亂の状態にあるものと相像するものあれども、これ固より皮相の見なり。諸子にして、暫らく此の處に在らば、次第に此の精神の機微に觸れて、自から其の案外に居心地良き處たることを感知すべし。由來學生修養の第一義は其の胸中に些の雜念を容れざるにあり、諸子、其れ能く此の精神の會得に努めて、こゝに諸子が安心立命の地を求めよ。若夫れ靜中に動を認め、動中に靜を觀するが如きは、抑高人の達見にして、遽かに之を諸子に期待し難きも、我が學校の如き、動もすれば人心に、外馳の機會を與ふること多き處に於ては、結局は、漸次此の域に到るを以つて、各自修養の理想をなすの必要あるべしと信ず。吾人は、こゝに始めて、諸子と金蘭の交を訂するに當りて、以上の婆心を布き、之を以て諸子を迎ふるの辭となさんとす。